

第72回（令和6年度）

## 西日本都市監査事務研修会

日 時 令和6年11月7日(木)～8日(金)

場 所 呉信用金庫ホール

開催都市 呉市

## 戦艦「大和」の建造を支えたモノやコト

呉市産業部海事歴史科学館学芸課 主査 花岡拓郎  
(大和ミュージアム 学芸員)

### 1 呉浦の風景

- ・江戸時代の半ばから明治 10 年代にかけて 深い入り江を段階的に埋立  
→ 広い平地と新しい海岸線の誕生
- ・伝統的な石積護岸の港に、草葺きと瓦葺きの町並み景観
- ・明治 10 年代にあって、まだ近代化の波が及んでいない様子
- ・海軍は明治 15(1882)年から 12 ヶ年の計画で全国測量
- ・呉地域の調査は明治 16(1883)年 海図「呉港」を制作
- ・港の水深と起伏、自然地形と人為の海岸線、後背の平地、外洋への接続、内海における立地などが軍港設置の決め手に

### 2 軍港の設計

- ・明治 20 年代初頭、海軍の保有する軍艦のほとんどは外国製
- ・呉より早く造船所が置かれていた横須賀、神戸、長崎などは軍艦の大型化によって造修能力の不足に悩む
- ・呉の湾全体を用いた新しい造船所、兵器製造所の整備に期待
- ・陸地側の固い岩盤を掘削しつつ、搬出された岩石と砂を用いて水深の深い海面を埋立  
→ 平らな土地を造成していく難工事から港の整備は始まる

### 3 軍港としての出発

- ・海軍は仏国や独国、英国や米国から様々な技術を導入
- ・国産の建材(木材、レンガ)と、輸入鉄材を用いて、呉に、軍事(軍需)施設が登場し始める
- ・機械工場には、英国や米国から輸入されたクレーンや旋盤、プレス機や圧延機などを設置
- ・外国に頼りながら軍艦と兵器製造の基盤を整備
- ・明治 20 年代半ば、庁舎建築や機械工場の設置によって呉の港の新しい風景が登場

### 4 軍艦をなおせる港、つくれる港へ

- ・清国、露国との緊張が高まる中、防備に優れた内海にあって横須賀よりも日本海から近い呉は、艦隊の整備、物資の補給、病院での治療などを期待される

- ・呉では兵器の製造から搭載までを可能とする一連の施設の整備、軍艦の修繕用、建造用の施設の設置が進む
- ・日清戦争、日露戦争において、呉は艦隊の整備拠点として役目を果たし、その地位を確立
- ・軍港としてのはじまりから約 20 年。複数のドックと船台が並び、軍艦をなおす風景、つくる風景がみられるように

## 5 大型の軍艦をつくれる港へ

- ・明治 36(1903)年、既存組織が再編され、呉海軍工廠が誕生。ただし、当初の風景は横須賀や長崎などに比べて小さなもの
- ・しかし、明治 45(1912)年に至るわずか 10 年の間に、世界に並び、世界を超える戦艦の建造を行える港に成長
- ・既存施設の大規模改修と必要施設の新設。ドックにあっては当時世界最大となる建造専用ドック(造船船渠)の建設
- ・港の風景は建造中の大型艦と巨大な造船施設がランドマークとなるものに。「扶桑」、「長門」、「赤城」を起工し、大型艦をつくれる港としての地位を築く

## 6 大型の軍艦を改装できる港へ

- ・大正 10(1921)年、ワシントン海軍軍縮条約が採択され、新たな戦艦を保有しないことに。現有大型艦の長寿命化や近代化が喫緊の課題となる
- ・当時、条約後に保有する戦艦の整備が可能な大きさのドックは4基(呉1基、横須賀2基、佐世保1基)。効率の良い改装工事を計画するため、呉では昭和 4(1929)年、世界最大級のドックを他の港に先駆けて整備
- ・昭和 12(1937)年までに「霧島」、「榛名」、「伊勢」、「扶桑」、「日向」、「長門」、「比叡」を近代化改装

### 7-1 東洋一の軍港 呉

- ・昭和 8(1933)年に発行された「呉軍港案内」に「東洋一の軍港 呉」という表現
- ・呉は装甲用の甲鉄と大砲の生産ラインとなる製鋼部と砲煩部を持ち、各地の造船所にそれらを供給する拠点
- ・昭和 4(1929)年の段階で他の軍港には無い造船用と整備用の世界最大級のドックを保持。大型艦を含む艦隊の整備拠点
- ・その頃、兵器と軍艦の造修(製造と修繕)面で国内4軍港の中では最大規模の能力

## 7-2 東洋一の軍港 呉

- ・アジア、太平洋の軍港例 ロシア極東のウラジオストク、中国の旅順、上海（呉淞）、香港（昂船洲）、朝鮮半島の鎮海、ハワイのパールハーバー、台湾の高雄、マニラのスービック、シンガポールのセレター
- ・いずれも前線の軍港であり、呉のように海軍全体を支える生産基盤は設けられていない。呉軍港には 5 基のドック、3 基の船台、係船堀、艀装棧橋（ポンツーン）、大型クレーンなども揃う
- ・まだ戦艦「大和」の建造計画も無い頃に東洋一の軍港が成立

## 8 「大和」型建造のための施設強化

- ・「大和」型は、航空母艦「赤城」より 3 メートル長く、「長門」より 4 メートル幅広。寸法だけでみると既に呉に構築されていた造船施設での建造が可能
- ・「大和」型用の甲鉄と主砲の製造・供給については、従来の呉の施設能力では不十分。必要な施設の追加設置を実施
- ・軍艦の建造史上、最大規模となった工事の生産性を高める狙いで施設の大規模改修と再編も実施
- ・大和型第一号艦「大和」の起工は昭和 12(1937)年 11 月。東洋一の基盤をふまえつつ、周到な準備をした上で実現

## 9 「大和」と「武蔵」の竣工

- ・「大和」型は秘密裏に敵船を上回る武装を持つことで、軍事的な優勢を取ろうとした新兵器
- ・昭和 13(1938)年（着工の翌年）、防諜体制の強化
- ・「大和」は進水後、艀装棧橋や第四船渠での工事を続け、昭和 16(1941)年 12 月に完成
- ・「大和」竣工の翌年、建造途中の同型艦「武蔵」が長崎から呉に回航。「大和」の工事と同じ場所で残工事を終え、竣工
- ・呉はその後「大和」と「武蔵」の修繕、改装を担うことに

# 災害時の監査対応等について

令和6年11月  
総務省自治行政局行政課  
白井 宏和